二〇二三年度

問題冊子

教科	科目	ページ数
国語	国語	14

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 試験終了時には、解答用紙の1ページ目を表にし、机上に置くこと。解答用紙は、解答の有無にかかわらず回収する。
3. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕 次の［文章Ⅰ］［文章Ⅱ］を読んで、後の問いに答えよ。

［文章Ⅰ］ 次の文章は、岡潔『春宵十話』（一九六三年）の、作者による「はしがき」の一部である。

著作権者の許諾が得られていないため本文を省略しています。

［文章Ⅱ］ 次の文章は、岡潔『春宵十話』についての、中沢新一による「解説」（二〇一四年）の一部である。

『春宵十話』の出版によって、多くの人々がきわめて風変わりな「新人エッセイスト岡潔」の存在を知った。数学の業績で文化勲章を受けた人物として、すでに著名な人物となってはいたが、一般の人々にとっては岡の数学研究などはチンプンカンプンで

も、彼が語る日本文化論や教育論には、大いに心を動かされた。

とにかくユニークで面白いのである。このエッセイは毎日新聞に連載されたあと、一九六三年に出版されるやたちまちベストセラーとなり、岡潔は㋐イチヤクブームの人となった。ちなみにその頃中学生だった私も、その本の虜（とりこ）になり、一時は本気で数学者になろうとさえ考えたほどであった。

「人の中心は情緒である」という書き出しではじまるこの本で、岡潔は日本文化の特性がこの情緒を土台に組み立てられていることや、それがいかに美しい心情を生み出してきたかを、さまざまな側面から論じている。また戦後の新教育制度の中で、いかにこの情緒的中心が教育の現場から排除されてしまっているか、それによっていかに子どもたちの創造性が㋑ソガイされているかを示して、警鐘を鳴らした。とくに教育の問題は、当時の日本の大人たちの多くが㋒キグを抱いていたこともあって、岡潔の主張は大きな共感をもって迎えられた。

その中で「情緒」という言葉は、多くの具体例をとおして㋓ジュウオウに語り出されているが、それがいったいどういう構造をもった心的現象であるかについての説明はほとんどない。九鬼周造〈注1〉における「いきの構造」のような「情緒の構造」といったものは、この本には書かれていない。しかしこの本を㋔タンネンに読んでみると、岡潔がそれについて明瞭な認識を抱いていたことが、断片的な記述をとおしてでもはっきりわかる。私たちはそれを元にして、彼が考えていた「情緒の構造」というものの核をつかむことができる。

たとえばこういう文章がある。

> また、数学と物理は似ていると思っている人があるが、とんでもない話だ。職業にたとえれば、数学に最も近いのは百姓だといえる。種をまいて育てるのが仕事で、そのオリジナリティーは「ないもの」から「あるもの」を作ることにある。数学者は種子を選べば、あとは大きくなるのを見ているだけのことで、大きくなる力はむしろ種子の方にある。これにくらべて理論物理学者はむしろ指物師〈注2〉に似ている。人の作った材料を組み立てるのが仕事で、そのオリジナリティーは加工にある。理論物理は

わずか三十年足らずで一九四五年には原爆を完成して広島に落した。こんな手荒な仕事は指物師だからできたことで、とても百姓にできることではない。いったい三十年足らずで何がわかるだろうか。わけもわからずに原爆を作って落したのに違いないので、落した者でさえ、何をやったかその意味がわかってはいまい。

数学者の仕事は百姓の仕事に近く、理論物理学者の仕事は指物師のそれに似ている、というのが岡潔の考えである。数学者は地面を耕して種子をまいて育てるが、重大なことはすべて土地、水、空気、気温、太陽などの「自然」がやってくれる。百姓は「自然」がうまく種子に働きかけて、無から有が生まれてくるのを助けるのを仕事とする。ところが、理論物理学者はすでに有るものを加工して別の形をした有るものにするのを仕事とする、だからその仕事は指物師に似ている。

岡潔の考えは、重農主義の経済学者ケネーの考えによく似ている。ケネーによれば、農業では自然の側からの無償の贈与があるおかげで、無から有が生まれるように、富の増殖がおこる。ところが指物師のような職人仕事あるいは商人や流通業者の仕事では、農業でおきているような自然の側からの贈与が働きかけてくることがないので、有が別の有に加工されていくだけで、そこには真の富の増殖がおこらない。ケネーも岡潔とよく似た思考によって、百姓の仕事と指物師の仕事を峻別（しゅん）することによって、経済の抱える難問に答えようとした。

彼らの考えに出てくる「自然が人間にさしだしてくれるもの」を、上手に受け取るための心の構えが、岡潔の言う「情緒」なのである。指物師やコンピューターの思考回路には、この「自然が人間にさしだしてくれるもの」を受け取る通路がつくられていない。現代世界では、岡潔の言う指物師の思考が、支配力をふるっている。そのために、この世界は自分が何をやっているのかわからないままに、原爆や原発をつくり、マネー資本主義に突き進んでいる。「人の中心は情緒である」のだから、情緒という自然への通路を失った人間は、中心を失った存在になってしまっている。

このように「情緒の構造」とは、「自然が人間にさしだしてくれるもの」を上手に受け取って生きるための通路の仕組みなのである。それは正しく、美しい生き方を可能にしてくれる。自分のしていることの意味がわからないというような、困った事態はそ

こではおこらない。『春宵十話』で岡潔が語りたかったのは、日本文化がこの「情緒の構造」を土台につくられているという事実にほかならなかった。③日本文化の美徳も弱点も、すべてはそこに起因する。

『春宵十話』はそれゆえ、現代にこそ読まれなければならない本なのである。私たちのまわりではいたるところで、「情緒の構造」の破壊が進行している。そのおかげで、私たちはますます自分が何をしているのか、見えなくなっている。人間はいまいちど「百姓」に戻って、ほんものの数学をやったり、まっとうな経済をやったり、美しい歌を歌ったりできなければならない。「情緒の構造」のあるところには、ほんものが存在できるからである。

（文章Ⅰ・文章Ⅱは岡潔『春宵十話』角川文庫による。なお、本文を変更した箇所がある。）

〈注〉 1　九鬼周造―大正・昭和初期の哲学者。日本文化を分析した著書『「いき」の構造』で知られる。

2　指物師―家具を作る職人。

問一　傍線部㋐～㋔のカタカナを漢字に直せ。

問二　傍線部①「自らの情緒を外に表現することによって作り出す学問芸術の一つ」とあるが、なぜこのように言えるのか。五十字以内で説明せよ。

問三　傍線部②「スミレはただスミレのように咲けばよい」とあるが、どういうことか。具体的に説明せよ。

問四　傍線部③「日本文化の美徳も弱点も、すべてはそこに起因する」とあるが、なぜか。具体的に説明せよ。

〔2〕 次の文章は、昭和三十四年に発表された安岡章太郎「雨」の結末部である。「私」は、「職もなく、家もなく、田舎に引き上げようにもその旅費もない」状態にあり、強盗をしようと決心して三日間町をうろついていた。ある家で実行しようとしたが、玄関からでてきた婦人や台所の匂いなどに動揺して失敗した。次はそれに続く場面である。これを読んで後の問いに答えよ。

私は、まえから思っているとおり、なるべく「計画」はつくらないことにした。なまじ計画をつくると、途中でちょっとでも計算の狂ったときにすぐ失敗しなくてはならない。ただ、こんどは他人の家へ乗りこむことはやめて、れいの草むらの繁(しげ)みにかくれて待ち伏せすることにした。

だが、どうしたというのだろう、いざ待ちはじめると不思議なほど、そこには人通りがないのだ。もともと㋐閑静なところを私は狙ったわけなのだが、それにしても一体ここには人間が住んでいないのかと思うほど、誰もとおらないのだ。……時計を持っていないので、どれぐらいたったかハッキリとはわからないのだが、たぶん一時間以上はその草むらのかげに、むなしく身をひそめていた。

ことによると、待っているという気持になることがいけないのかもしれない。

草むらから、道路をへだててすぐ向う側に大谷石の㋑塀が無表情に立ちふさがっているのを見ながら、私はそう思った。大谷石の塀のとなりにはコンクリートの塀が、そして反対側のとなりには石垣の上に芝生の土堤の塀がまるでひとの忍耐心を試(た)めそうとでもするように立ちふさがっているのである。……まったくどうしたというのだろう、昨日はたしかこのへんで、雨の中を犬にレインコートを着せたアメリカ人の婆さんと行き会ったし、その前の日も若い娘が一人でとおるのを見送った。それがきょうにかぎって犬の仔(こ)一匹も通らないのは、よくよく私は運が悪いのだろうか。

退屈のあまり、私は草むらから半分立ち上ったところだった。いきなり真正面から人のやってくるのが見えた。

（しまった、顔を見られたか？）

私は急いで、またもとのようにしゃがみこんだ。もし顔を見られたのなら、堂堂と立ち上った方がいいのだが、五分五分のと

ころで向うは気がついていないと私は判断した。真正面からといっても距離はかなりあいていたし、おまけにこちらは逆光線だったからだ。……それにしても、その男の紋付の着物に袴をつけ白足袋に足駄〈注1〉をはいた服装は、まわりとくらべると何とも不調和なものだった。それだけでも私はおどろいていたのだが、道路からいきなり公園の中へ入ってきたのには愕然とさせられた。そして私のしゃがんでいるところから二メートルほどはなれた径を、真直ぐに、何かつぶやきながら歩いて行った。ほそい頸筋に、丸坊主の頭がゆらゆら揺れている感じだ。

「どうもいかんですぞ、どうも。……なかなかいかんもんですぞ、なかなか」

そんなことを繰り返し云っていたかとおもうと、片手に抱えていた白い箱の包みを、傘を持った片手に持ちかえて抱えこみ、それから木立に向って放尿しはじめた。

「どうもいかんですぞ、どうも……」

どうやらそれは自分自身に云って聞かせているらしかった。片手に傘と包みを持ち、片手で袴の前をたくし上げているその恰好は、ひどくあぶなっかしげで、見ているだけでもイライラさせられたが、それ以上に腹立たしかったのは、用がおわっても彼が一向に立ち去るけはいもなく、ひとりごとを云いつづけていることだった。

「どうもいかんですぞ、この町の人間ときては、体裁の好えことばかり云うて、自分のことしか考えん、宗教も信仰もあったもんじゃない、どうもいかんですぞ」

彼の職業は神社の神主でもあるのだろうか。白い包みの中にオミクジか守り札でも入れて売って歩いているのかもしれない。だとすれば私は、ここで①彼に一種同業者的な親しさを感じてもいいわけだ。ところが、じつはそれだけに彼の云うことが何となくカンにさわるのだ。

「こちらは子供が七人もおるというのに、その日の食うのがないというのに。……どうもいかんですぞ、この町の人間どもは、自分に関係がないとおもうと、びた一文出しおらん」

一体いつまで、この男はこんなことばかり云っているのだろう？　ふと見ると目の前の道路を、黒いレインコートを着た中年

の小肥りの女がうつ向きかげんに歩いて行く。絶好のチャンスだ。いま飛び出して行ってナタを振り上げたら、それだけでハンドバッグをほうり出して行くにきまっているのだが……。

いつの間にか私は、この無能そうな神主ふうの男に、すっかり束縛されてしまっていることに気がついた。じつは私自身もさっきから尿意をもよおしているのだが、彼のおかげで身動きできないのだ。いっそのこと、先ずこの男を襲ってやろうかとも思うのだが、彼の繰り言を聞いていると、なぜかそれも出来なかった。同情するわけでは決してないのだが、そのぼそぼそと低くひびく声は耳にしただけで、気が滅入り、体じゅうの力がぬけて、何をする気もしなくなるのだ。

やがて、つぶやく声はしなくなった。だが私がほっとしたのは一瞬だった。ふと見ると、おどろいたことに彼はうつ向いて弁当を食っているのだ。それを見ると私は、いっぺんに絶望的な気持になってきた。と同時に、この三日間、張りつめていた心がゆるみ、けさからまだ何も胃袋の中へ入れていないということが、切実なおもいで憶い出された。

私は心から、この男に怒りをおぼえた。男は絶えず口をならしながら、タクアンを噛んでいる音や、ときどき冷い飯のかたまりでも喉につっかえるのか、

「カオ、カオ」と、ニワトリが固い餌でも呑みこむような音を立てるのが、はっきり聞きとれる。私は、すんでのことに草むらの中からおどり出し、男が食いかけている弁当をひったくって、泥で濁った池の中へ投げすててやろうとした。そのときだった。暗やみの背後から、

「もしもし、……」と、なまりの強いだみ声がひびいた。警官だった。

「もしもし、あんた、何をしてるんですか、この公園は夜は中に入っちゃいかんと、ちゃんと表に書いてあるじゃないですか。……もしもし、はやく行きなさい。はやく出て行ってくれんと……」

しかし、男は一度、無言で振り向いただけだった。彼はまるで魅入られたように弁当をつかう箸をやすめないのだ。……

「困ったな」と根負けしたように、そのまま警官が立ち去るのも知らぬげに、一心に食い耽っている。

私は草むらから立ち上った。男のまうしろでとまると、しばらく彼が食うのをながめていた。ほそい頸筋の両脇から、はり出

した鰓骨が咀嚼のために絶え間なしにうごいているのが見える。鉢のひらいた丸坊主の頭と、ふかくくびれた延髄をながめるうちに、私の殺意は次第に昂まってきた。(オ)襟首からのぞくシワのよった皮膚から、むれるようなタクアンの臭いが漂ってきそうだ。弁当を食いおわった瞬間をねらって、坊主頭の真ん中にナタを叩きつけよう。私はレインコートの前ボタンをすっかりはずした。こんどこそ、やっつけて見せる。だが、そのとき、男の口から、また不意に、つぶやきがもれた。

「……これではかえれない。……これではかえれない」

一体、どこへ帰れないというのか？　かえれない、とはどういうことか？　ことによると彼は水揚げ〈注2〉がすくなすぎるのを苦にしているのかもしれない。しかし私には、その低く重く地を這うような声が、端的に故郷や家の暗さを想わせ、ナタの柄をにぎりしめた手から力がぬけそうになるのだ。

ひとしきり、やんでいた細かい雨が、また降りはじめたのか、木の葉や下草を叩くシズクの音が聞え、頬に冷いものがかかった。私はもう一度、ナタの柄をにぎりなおしながら、大きく息を吸いこんだ。しかし、男は依然として、箸と弁当を両手に持ったまま、行きくれ〈注3〉たような言葉をつぶやきつづけるのである。③「これではかえれない、これではかえれない」

（岩波書店刊『安岡章太郎集3』による。なお、本文を変更した箇所がある。）

〈注〉

1　足駄―雨降りなど道の悪い時にはく高い歯のげた。

2　水揚げ―商売などの売上高、稼ぎ高。

3　行きくれ(る)―目的地に行く前に日が暮れること。

問一　傍線部㋐〜㋔の漢字の読みを平仮名で書け。

問二　傍線部①とあるが、「私」はなぜこう考えたのか、説明せよ。

問三　傍線部②とあるが、「私」はなぜここで「心から」「怒り」をおぼえたのか、詳しく説明せよ。

問四　傍線部③の男のつぶやきは、「私」にとってどんな意味合いを持ち、どのような状態に「私」を追いこんでいると考えられるか。そのような事態に至った理由もあわせて詳しく説明せよ。

〔3〕 次の文章は、『雨月物語』「蛇性の婬」の一節である。紀伊の漁師の次男でありながら風雅ばかりを好む夢見がちな青年であった大宅の豊雄は、雨宿りした先で都風の美女真女子と出会う。翌日その女の家を訪れた際に愛を告白され婚約するが、次に同じ家を訪れると廃墟となっており、真女子は雷とともに姿を消した。その後、真女子は再び事情を偽って豊雄に迫り夫婦となるが、大倭の神社の翁に正体が蛇であることを見破られ滝の中へ消えた。以下の場面は、二度までも真女子に惑わされた豊雄が別の妻を迎えるところから始まる。これを読んで、後の問いに答えよ。

父母太郎夫婦、此の恐しかりつる事を聞きて、いよよ豊雄が過ならぬを憐み、かつは妖怪の執ねきを恐れける。「かくて〈注1〉鰥にてあらするにこそ。妻むかへさせん」とてはかりける。芝の里に芝の庄司なるものあり。女子一人もてりしを、大内の采女〈注2〉にまゐらせてありしが、此の度いとま申し給はり、此の豊雄を聟がねにとて、媒氏をもて大宅が許へいひ納る。よき事なりて即因〈注3〉みをなしける。かくて都へも迎の人を登せしかば、此の采女富子なるものよろこびて帰り来る。年来の大宮仕へに馴こしかば、万の行儀よりして、姿なども花やぎ勝りけり。豊雄ここに迎へられて見るに、此の富子がかたちいとよく万心に足ひぬるに、①かの蛇が懸想せしこともおろおろおもひ出づるなるべし。

はじめの夜は事なければ書ず。二日の夜、よきほどの酔ごこちにて、「年来の大内住〈注4〉に、辺鄙の人ははたうるさくまさん。かの御わたりにては、何の中将、宰相の君などいふに添ぶし給ふらん。今更にくくこそおぼゆれ」など戯るるに、富子即面をあげて、「古き契を忘れ給ひて、かくことなる事なき人を時めかし給ふこそ、こなたよりまして悪くあれ」といふは、姿こそかはれ、正しく真女子〈注5〉が声なり。ⓐ聞くにあさましう、身の毛もたちて恐しく、②只あきれまどふを、女うちゑみて、「吾君な怪しみ給ひそ。海に誓ひ山に盟ひし事を速くわすれ給ふとも、さるべき縁にしのあれば又もあひ見奉るものを。他し人のいふことをまことしくおぼして、強に遠ざけ給はんには、ⓑ恨み報ひなん。紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峰より谷に灌ぎくだ

さん。③あたら御身をいたづらになし果て給ひそ」といふに、只わななきにわななかれて、今やとらるべきここちに死に入りける。屏風のうしろより、「吾君いかにむつかり給ふ。かうめでたき御契なるは」とて出づるはまろやなり。見るに又肝を飛し、眼を閉て伏向に臥す。和めつ驚しつかはるがはる物うちいへど、只死に入りたるやうにて夜明けぬ。

〈注〉

1 かくて鰥にてあらするにこそ―こうして豊雄を独身にしておいたから、こんな災いに巻き込まれたのだろう。

2 大内の采女―地方官人の娘の中から差し出される宮中の女官。

3 因み―婚姻。

4 年来の大内住に～―以下、豊雄から富子への嫉妬交じりの冗談。長年宮中で勤めたあなたは私のような田舎者はお嫌いだろう、宮中で高貴な男と関係を持つこともあっただろう、という内容。

5 ことなる事なき人―特に優れたところのない人。

6 まろや―真女子の召使の童女。

問一　傍線部ⓐ「時めかし給ふ」、ⓑ「恨み報ひなん」、ⓒ「めでたき御契」を現代語訳せよ。

問二　傍線部①「かの蛇が懸想せしこともおろおろおもひ出づるなるべし」とあるが、豊雄が真女子との関係を想起したのはなぜか、説明せよ。

問三　傍線部②「聞くにあさましう、身の毛もたちて恐しく、只あきれまどふ」とあるが、豊雄がこのような反応を示したのはなぜか、説明せよ。

問四　傍線部③「あたら御身をいたづらになし果て給ひそ」は、命を無駄にするなという趣旨の言葉であるが、豊雄に具体的にどうすることを求めているのか、説明せよ。

問五　女が「もののけ」として男の愛を求めるという筋立ては、ある平安時代の物語を踏まえたものである。その作品名を答えよ。

〔4〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがある。）

後漢魯恭、字仲康、扶風平陵人。〈注1〉〈注2〉粛宗時、拝中牟令。〈注3〉ⓐ専以徳化為理、不任刑罰。〈注4〉郡国〈注5〉螟〈注6〉傷稼。〈注7〉犬牙縁界、〈注8〉不入中牟。〈注9〉河南尹袁安聞之、①疑其不実、使仁恕掾肥親往廉之。〈注10〉恭随行阡陌、〈注11〉ⓑ俱坐桑下。有雉過而止其傍。傍有童児。親曰、「児何不捕之。」児言、「雉方雛。」親瞿然起、与恭訣曰、②「所以来者、欲察君政迹耳。〈注12〉〈注13〉〈注14〉〈注15〉今、虫不犯境、化及鳥獣、③竪子有仁心。〈注16〉三異也。」還府、以状白安。〈注17〉是年、嘉禾生恭便坐庭中。〈注18〉安上書言状。〈注19〉帝異之。在事三年、〈注20〉州挙尤異。〈注21〉〈注22〉去官、④吏人思之。後為司徒。〈注23〉

（『蒙求』）

〈注〉

1　扶風平陵―地名。　2　粛宗―後漢の第三代皇帝、章帝のこと。　3　中牟令―官職名。中牟県の長官。

4　理―政治。　5　郡国―郡と国。いずれも地方行政区画。ここでは各地の意。

6　螟―ズイムシ。穀類の植物の茎を食べる虫。　7　稼―農作物。

8　犬牙縁界―犬の牙の形のように折れ曲がって入り組んだ境界線。

9　河南尹―官職名。中牟県を管轄する行政区画の長官。　10　仁恕掾―官名。　11　廉―調査する。

12　阡陌―あぜ道。　13　瞿然―驚くさま。　14　訣―別れを告げる。　15　政迹―政治の成果。

16　竪子―子ども。　17　状―実状。　18　嘉禾―吉祥とされた珍しい稲。　19　便坐―控えの間。

20　事―職務。　21　州―官吏に対する監察の区画。ここでは中牟県を管轄する監察区画を指す。

22　尤異―特に優れた治績。　23　司徒―官職名。民政をつかさどる大臣。

問一　傍線部ⓐ・ⓑの読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。

問二　傍線部①はどういうことか、「其」の内容が具体的にわかるように説明せよ。

問三　傍線部②を書き下せ。

問四　傍線部③は、具体的にどのようなことを指しているか、説明せよ。

問五　傍線部④を現代語訳せよ。その際、「之」の内容をはっきりさせること。なお、傍線部中の「人」とは、民のことである。